(1) 第722号 (月決め 30円 120円) 昭和44年6月8日 日曜日
(昭和42年6月28日・国鉄運輸局長第3号 昭和42年3月16日第3種郵便物認可)

70年安保
=連載第3回=
「劇薬の処方箋」
(4・5面)

暮らしの向上に 企業の発展に
お近くの《サンワ》を
ご利用ください
みなさまのお役に立つ
三和銀行

THE TOKYO OBSERVER
オブザーバー
真実の追求
国際的ビジョン
正義と平和
〔毎週日曜日発行〕
6月8日～6月14日
© 発行所 大森実国際問題研究所
東京オブザーバー
本社東京都渋谷区渋谷1の6の10
電話(代)(400)8351 振替 東京66836
編集発行人 大森 実

愛知訪米の貸借対照表

愛知外相の訪米を軸として、日米関係は、全く新しい段階に入ったとみてよい。沖縄返還の条件が、どうなるか、という具体的な成果とは別に、日本とアメリカが、これまでとは違った相関関係に入る意義深いシキリの役目を果したというべきだが、それだけに、アメリカは、これからの日本にきびしい要求や注文をつけはじめるだろう。川奈ホテルでのASPAC（アジア・太平洋協議会）関係会議から七月末の日米経済合同会議へと、新しい関係に入った日米間の諸交渉は、極東における防衛分担と、資本自由化という、軍事、政治、経済面での日本の負担をいや応なしに増してゆきそうである。

本社主幹 大森 実

「72年返還」取りつけ「核抜き」は「自由使用」が代償

沖縄の空をおおう"黒い翼" 嘉手納基地からベトナムに向けて発進するB52（嘉手納で、上田泰一前特派員撮影）

愛知外相の訪米中に発表された二ューヨーク・タイムズ紙の新聞記事――ニクソン米大統領が四月の安全保障会議で沖縄の返還を決定した」とする記事は、「信じてよい報道」である。かなりの根拠ある報道となってよいが、沖縄から撤去されるという核兵器が、地上にあるか出撃に使用される三十二基の戦略核ミサイル（中距離弾道弾）メースBを意味するのか、それとも、沖縄の基地所有潜水艦に搭載されている爆弾やポラリス、ポセイドンなどの核弾頭の撤去をも含めた決定なのか、その点、ニューヨーク・タイムズ紙の報道はアイマイである。

ミサイルでは、撤去を決定したとは、明言されていない。

ケネディ大統領により、一九六二年に沖縄に配置されたメースBは、すでに対ソ戦略の前面に立ち、中国の爆撃機で、官島に接近する脅威である。危上に迫ったメースBの撤去は、敵の対抗攻撃の目標とならうるメースBの撤去は、首脳代表の激しい抵抗の機関の中で、「撤」オクフに対する運命にあるというほかはない。

ニューヨーク・タイムズ報道の中で、より重要な点は、この核兵器の撤去が、沖縄返還の自民的な条件と密接の関係にかかることを指摘、暗に米軍が沖縄基地の「自由使用」を条件にけようとしていることを示している点である。

日本側が、愛知外相の口を通じて、ニクソン大統領やロジャース国務長官に強調した「本土並み」の返還条件は、「基地・自由使用」という表現の新表現に置き換えられたのである。

ニクソン米大統領と会談する愛知外相（WWP）

裏面に記録された資本自由化

伝すべき情報にされれば、愛知外相は米側筋から「七二年返還」の約束をとりつけたようであり、復米前から、ジョンソン国務長官と日本大使間の秘談にわたる事前の交渉、「七二年返還」の保証書が交換されていたようにいわれる。

十二月に定されたる佐藤訪米の共同声明の中に、この「七二年返還」の約束が文案大書され、佐藤訪米のデコレーションとなる計画、そのあと解散、総選挙への図り作戦が書きあげられているようである。ちがった見方をすると、七二年という長期の返還決定を条件として、「七二年返還」の約束を確保しておくことは、「自由使用」という表現の新表現に、かたちの変化があるようである。

ミリタリズムへの道を「約束」

もっと重要なことは、先日の四次防につながる長期計画が示す日本の国防政策の

太平洋大学 第4回夏期セミナー

A. 空飛ぶ太平洋大学（アメリカ）
ミシシッピー河（またはテネシー河）で船上セミナー
8月13日～9月3日（22日間）限定会員制

B. 韓国セミナー
緊張下の38度線を行く
7月10日～7月17日（8日間）4万9千円

C. ヨーロッパ・ソ連セミナー
6月28日～8月1日（35日間）47万円

ペプシ・スカラシップ論文を募集

第4回太平洋大学「ミシシッピー船上大学」に「ペプシ・スカラシップ」が設定され、公開されることになりました。

これは「日本とアメリカ」をテーマとした論文コンテストで、太平洋大学へ深い理解を寄せるペプシ・コーラが、当大学の総宿に資同し、スカラシップの設立だけでなく、アメリカ各地のペプシ・コーラの提供とシカゴでの工場見学およびレセプションを予定しているものです。ふるってご応募下さい。

テーマ 「日本とアメリカ」（日本語のみ）
200字詰め原稿用紙10枚以内
応募資格 太平洋大学に参加しうる者
締切り 6月15日必着
賞 第一席（一名）太平洋大学「ミシシッピー船上セミナー」受講料全額支給
第二席 三名 同受講料半額支給
第三席 六名 同奨学金
入賞発表 6月20日（本紙で発表するほか本人へ直接通知します）
授賞式 7月1日
提出先 太平洋大学 ペプシ・スカラシップ係
詳細の問合せは 東京都渋谷区渋谷1－6－10
大森実国際問題研究所
TEL400－8356－9
（説明書入用の方は15円切手を同封ください）

三一書房 東京神田駿河台2
渡辺眸・撮影
東大全学助手共闘会議編
東大全共闘
☆われらにとって東大闘争とは何か―
第一部・写真構成・東大全共闘
すべての表現が乱れ、日常性の秩序が浮かび上って生き生きと躍動する日々、こうした日々は、自分の確信と表現のみを刻むべく、あらゆる偶像を破壊し、既成の秩序に抵抗しているすべての個人・組織とともに、一刻一刻が生命の燃焼を感じさせる、とはなる充実した日々であり、また、自己の存在の切ない意味がとことん問まで試される試練の日々である。
第二部・東大闘争とはなにか
大学闘争の意味＝羽仁五郎
心情共闘派はいかにインチキなものか＝野坂昭如
東大全共闘＝山本義隆
第二の青医連の構築をめざして＝川島宏
東大闘争維感＝塩川喜信
座談会・われらにとって東大闘争とは何か
中島河太郎・谷川健一編／全七巻・各980円
15日刊
菊判・850円

三一書房 東京神田駿河台2
★一切の擬制的知性への反逆！
京大神話の崩壊
京大闘争
●京大新聞社編／京大全共闘協力
四六判・560円
〈国家〉の暴力を容認し、〈暴力学生〉を云々する人びとを僕らは敵とする。
僕たちは、〈国家〉の呪縛を断ちきり、自己を解放しようとする人びととの全的な連帯をのみ希求する…〈京大闘争〉を語るにあたって、われわれは常に〈あるべき全共闘運動〉を追求した。〈あるがままの全共闘〉を〈神話〉化したところでわれわれ自身にとって何らの進歩もかちとりえない。
われわれはそれを〈全共闘運動〉のなかで学んだ（「序」より）

三一書房 東京神田駿河台2
◆第一巻・絶讃発売中！
狂気の復権／錯乱の中に美を、秩序の破砕を！
土着のなかからロマンティシズムの翼を極限まで展げて構築する〈あやかしの世界〉／
豊富な可能性を秘めた膨大な宇宙の初の集大成
蕗野久作全集

愛知訪米の貸借対照表

一面つづき

「ニクソン氏との日米パートナシップに浮き沈む」「愛知外相の訪米は、仲間内の慰安旅行」「自民党内の指導者層は個人的な」「教育の問題は国民的な」「十二月の佐藤訪米への期待はしぼむ」「感じはこの『訪問』のバランスシート」について大衆紙の見出しが踊ったが、同時に"内の監

佐藤訪米の地ならしに成功

南方同胞援護会　比嘉正詔

愛知外相の訪米は成功であった。たしかにニクソン氏との会談は、四十分ぐらいしかなかった。十二月の佐藤首相訪米の地ならしはできたと思っている。

それというのも「ニューヨーク・タイムス」が報じているように、歴史の流れは沖縄返還の問題へと流れる。

ベトナム戦争の収拾をはじめ諸問題の解決にも、沖縄返還の問題がからんでいるのであり、今後の話合いに期待したいものである。

街の監察役に聞く

対米交渉は"世論工作"

沖縄返還実現国民運動連絡会議　黒野波三

愛知外相の訪米は、ほぼ以外のものもあったのである。そして十二月の佐藤訪米の"成果"もあって、連絡会の運動は、ますます強化されるであろう。

それに、五月二十日からインドネシアで開かれる東南アジア条約機構（SEATO）理事会でベトナム参戦問題が、あるいは、ASEANの問題が、論議されるであろう。

混迷続けた四年間

ASEANに対する日本側の一貫した態度は、SEATOとは異なる自国の一貫した方針をもって、ASEANの機構の参加によって、積極的な貢献を強いることなく、参加国の経済力を、そのすべての問題を解決する原動力とするASEANの問題である。ASEANは、東南アジアにおける国際的な問題であり、その門戸はASEAN加盟の共通加盟国対象に開かれている。ASEANは、東南アジアにおける国際的な問題であり、その門戸はASEAN加盟の共通加盟国対象に開かれている。

避けられぬ"肩代り"

ジョンソン政権の北爆停止声明は、ベトナム戦争問題への解決は、反共のもとに、ASEANに"肩代り"を押しつけようとしている。

つまり今回の第四回会議は、ベトナム戦争問題への解決は、反共のもとに、ASEANに"肩代り"を押しつけようとしている。

韓国に危機感

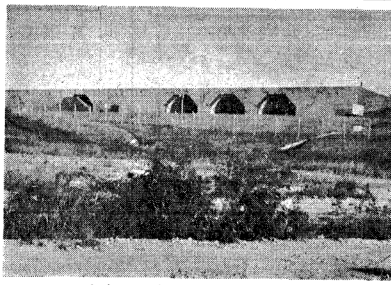
第四回アジア・太平洋閣僚会（ASPAC）閣僚会議は、台湾で三日間、韓国、南ベトナム、タイ、マレーシア、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランドの閣僚を迎えるこの会議は、ASPACの存在意義を問われる。今回の会議は、ASPACの存在意義を問われる。

「反共の母体」へ？

日本の主張にも限界

沖縄返還問題の解決を目指して、ASPACの閣僚会議が、ASPACの存在意義を問われる。

幕あけるASPAC閣僚会議



不気味な黒い穴　メースBの格納庫の扉は"空気清浄"のためかときどき開けられる。向って右から2、3、4番目の扉は開き、左から3番目の扉は開きかかっている（沖縄・ホワイトビーチで）

信頼できない佐藤外交

（21歳の男性）

ムシがよすぎる日本の要求

（19歳の男性）

制服のおしつけはイヤです

（26歳の女性）

沖縄は「独立国」にすべし

アジア集団安保体制が本命

（26歳の男性）

「本土なみ」の態様に危険性

（34歳のサラリーマン）

世間ばなし

柴田　劍太郎

「2・4統一行動」の日に反戦ビラを在沖縄米軍兵士にくばる女子学生

交通安全定期

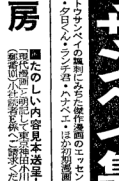
事故は思わぬときに

貯蓄は計画的に

神戸銀行

現代漫画

全15巻　笑いと諷刺の傑作全集

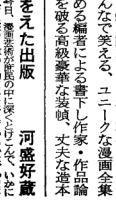


<編集>
北鶴見俊輔
佐藤忠男
杜夫

戦後の傑作漫画　初のアンソロジー！

あふれるユーモア、鋭い諷刺、しゃれた現代的センス　家中で読める、みんなで笑える、ユニークな漫画全集　漫画への理解を深める編者による書下し作家・作品論　漫画本のイメージを破る高級豪華な装幀　丈夫な造本

まことに時宜をえた出版　河盛好蔵



1 横山隆一集　2 横山泰三集　3 荻原賢次集　4 加藤芳郎集　5 水木しげる集　6 手塚治虫集　7 小島功集　8 つげ義春集　9 白土三平集　10 國山俊二集　11 東海林さだお集　12 石森章太郎集　13 赤塚不二夫集　14 漫画戦後史Ⅰ　15 漫画戦後史Ⅱ

■A5判・上製・函入・口絵また は図解13頁・平均330頁／定価＋各800円

第1回発売中　第8巻　編集 佐藤忠男

サトウサンペイ集

サラリーマンの残存アー・サトウサンペイの編集による傑作漫画のエッセンス！フジ三太郎・スカタンGO・夕日ブルース・ハンペイ・ヨッ！はお初登場！

■たのしい内容見本進呈！（現代漫画）と（図解）で東京神田小川町2（象堂）小社宛葉書1枚ご請求ください。

筑摩書房

三省堂新書

今月の新刊

■三省堂／東京都千代田区神田神保町1−1／郵便番号 101

大学ゲリラの唄

安田砦の落書——そこには、熱く重い若者たちの魂の表白がある！

落書　東大闘争＝採録／岡本雅美・村尾行一　¥200

大学闘争に主体的にかかわってきた者たちの情念は、規格には、まったくとはめ切れない。本書は、劇的な攻防戦の前夜に安田砦の壁に咲いた落書、パロディや小話などを集めた東大闘争の一つの裏面史である。

錆との戦い

華やかな近代生活の裏側にひそむ、錆と人間との宿命的な戦いを描く

井上勝也　¥220

錆びない鉄と考えられているステンレスも、実は透明な錆で覆われている。錆の世界は奇想天外で、きわめて科学的なモチーフを提供する。この近代生活の敵、錆へ挑戦する人間の知恵の歴史を平易に説く。

好評の既刊！

落語芸談　上・下

上巻・桂文楽・林家正蔵／下巻＝三遊亭円生・柳家小さん　■聞き手＝庫崎隆彦

落語界の第一人者が庶民の芸術＝落語について語る貴重な芸談。上・下各冊¥220

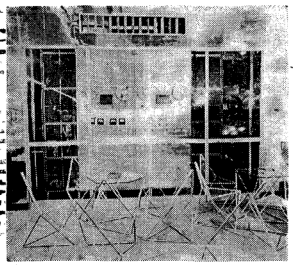
考える高校生

新しい世代の意見と現実／学生通信編集部

テスト体制のもとで若々しく生気神を奪息させられ、考える力を奪われつつある高校生の真の歩みだす方向を探る！　¥200

浜野安宏のサブ・カルチャー評論

芸術の日常化
芸術の終り



ナッシングマシンの彫刻でアストロメカニクールの壁画（浜野安宏氏の作品）

〈筆者のプロフィール〉 環境造形家、ファッション・デザイナーでの現多彩な右面で活躍する"新感覚派"の第一人者。昨年日本を風びした女性デザイナーグループ「MUGEN」の会「ASTROMECHANICOL」「青山 BODY STRIP SHOP」などを次々に時代の先端をゆく作品で、枚挙に暇がない。今年、三月から四月にかけ、約二カ月間五度目のアメリカ視察旅行をしてきた。日大芸術学部映画科出身。本社文化委員顧問。37歳。

アートの大衆化、既成概念の破壊、表現パターンの多様化、新形式の探求、伝統と先端ハーフニング、美術の風俗化、環境芸術化、アートデザインの接近、意識の解放、感覚の解放、認識の拡大、テクノロジカルアートとの結合促進……。今日おいて芸術とは何であるかという神秘問いかけのまえに、芸術がはたして、どこ存在価値があるのか問題、そして芸術やデザイン・テクノロジーという言葉のアイコンの中に、いったいなにがあるのか、あるべき価値観が問題にされなければならない。ここで問題になっていることは、あらゆる価値が問題にされるようになってきている、断絶の時代としての世界である。私の考え方では、まず芸術価値というものは、一定時間の、一定の場所において芸術いわるものであろう。なぜならばエンタテイメントの、ファッションの、ポップ・ホルガ的に、芸術の、ある意味の、ある価値が、あるべき価値が問題にされるようになってきている。断絶の時代としての世界である。私の考え方では、まず芸術価値というものは、一定時間の、一定の場所において芸術いわるものであろう。なぜならばエンタテイメントの、ファッションの、ポップ・ホルガ的に、芸術の、ある意味の、ある価値が、あるべき価値が問題にされるようになってきている、

70年安保

劇薬の処方箋

連載第3回

本社主幹 大森 実

連帯網のカナメ

一九六八年一月二十三日。

これは想定の図上研究ではない。元山沖でプエブロ号が拿捕されたとき、第七艦隊機動部隊や、在日米空軍が、いかなる緊急措置を講じたか？

一九六九年四月十五日。

米軍偵察機EC121の撃墜事件のとき、在日基地はどうなっているか？

事実は、三矢研究にきわめて近い展開を遂げたのである。

スクランブル――自衛隊では、緊急発進体制を原語のまま、スクランブルと呼んでいる。世界が大きく揺れるとき、日本の自衛隊も、スクランブル体制に入る。戦時体制を意味している。

航空自衛隊のスクランブルは、その緊迫度により、1度から2度、3度の三段階になっている。

もし、航空自衛隊に1度のスクランブル下令が出れば、それは、直ちに戦闘に突入する姿勢だが、航空自衛隊に発令された過去三回のスクランブル下令は、いずれも2度であった。

で、自衛隊の航空総隊司令部が存在し、司令部もろとも、アメリカの極東戦略体系の中に組込まれている事実は、もはやいまでは常識となっているが、府中第五空軍司令部の中のレーダー・スクリーンから、北朝鮮に出動中のEC121の機影が、突如として姿を消したのである。

騒然となるのは、むしろ当然であったろう。

第五空軍の直轄下にある米空軍基地は三沢、横田、立川、板付、嘉手納、島山、群山である。朝鮮から沖縄までを傘下に収め、各基地にあるレーダーはすべて府中に直結している。そして、そこに日本の航空隊総司令部がある。

米空軍がスクランブルに入れば、ほぼ自動的に航空自衛隊もスクランブルに入った事実は、さきに述べた米韓、米台、米比および日米安保の四本の連帯綱が、府中をカナメとして一本化し、四つの単独双務条約が、府中において集団条約化されているとみてよいはずである。

日米安保は六〇年安保から七〇年安保に向い、ある固定の鋳型の中に、いや応なしに、はめこまれつつあるようだ。

この点に関し、私の観察を述べてみたい。

第一回はキューバ危機の際、第二回目は六五年四月のRB47撃墜事件のとき、第三回目がプエブロ号拿捕事件の際であった。

四月十五日。

府中にある第五空軍司令部が突然、緊迫し騒然となった。府中の第五空軍司令部に並んで、ニクソン米大統領が、一九六八年五年四月のRB47撃墜事件のとき、第三回目がプエブロ号拿捕事件の際であった。

四月十五日。

府中にある第五空軍司令部が突然、緊迫し騒然となった。府中の第五空軍司令部に並ん

ます、ニクソン米大統領が、一九六八年の大統領選挙中に明らかにした「諸問題回答集」をひろげ、沖縄返還に関するニクソンの考え方にフット・ライトを当てたい。

「究極的には、アメリカの極東政策は、沖縄を日本に返還するのが得策だと考えるが、長期的にみて、日本とアジアの利益は、太平洋におけるアメリカの利益である。もし日本がそのリーダーとしての役割を引受けるのであれば、沖縄は確実に日本に返還されるはずである」

ニクソンが選挙中に明らかにした沖縄返還の条件だが、その条件は、重光―ダレス間でいったん共同声明の中に明記しながらも、物議をかもした「西太平洋における国際平和と安全の維持に貢献しうるような条件」と全く同意義の、指導的防衛分担の責任を、日本が背負うという条件にほかならない。

いったい、ニクソン米大統領や、彼を取まく米政府、軍首脳部は、日本の安保反対世論を知らないのであろうか、それとも、それを強引に無視し去ろうとしているのであろうか。私はいずれに対しても「ノー」と答えたい。

そのためには、米国の世論の傾向と国内事情に目を転ずる必要がある。

話題を一九六六年夏のアメリカにもどそう。七月十二日、ジョンソン大統領が、"太平洋国家論"を提唱し、ベトナム戦争に取組むアメリカの、論理的根拠を明らかにしたとき、米上院外交委員長のフルブライト議員が、これに真っ正面から噛みついたことがあった。

フルブライトの反撃

幸い、私は、フルブライトがこの演説を発表した直前、おもしろい組合せだが、いまから爆弾演説をやるという五分前に、上院でフルブライトと会っていたので、この事件はより印象的であった。

フルブライトはこう演説した。

「ジョンソン大統領が発表した米政府の、新しいアジア政策は、アジアにおける非共産国家のために、米国が、警察と仕送り人（パトロン）の役割を果そうとするものである。最近、米国には、アジアに対するモンロー主義ともいうべき、アジア主義が台頭しつつある。

これは米国にとって、取り返しのつかない国家義務となる怖れがある。上院は、そうならない中に、このアジア主義が包含する意義を検討しなければならない。しかるに、上院はこの問題を上院に対して、上院の使命である"勧告と承認"（アドバイス・アンド・コンセント）を求められるところが、通告さえ受けていない」

ジョンソン大統領が、ベトナムに地上部隊を送り、アジアの戦争の渦深く介入したことを、"太平洋国家論"なる演説で、論理的に正当づけようとしたことに対するフルブライトの反駁であった。

もちろん、ジョンソン大統領は再び真っ向から切り返し、激しい応酬となって、アメリカの世論はなりゆきに注目をした。

行司役リップマン

この大論争に対し、評論家ウオールター・リップマンが、行司役を買って出た。リップマンは大統領を斬り、公然とフルブライトを支持する論文を公開したのであるが、この論旨は、いまにして、日米安保をめぐるアメリカ世論の傾向と、ニクソンの思潮的背景をさぐるための好個の資料になると思えてならない。

「アメリカには、いま太平洋の大国として、義務を果たす用意のある大統領がいるそうだ。ジョンソンは、七月十二日の演説で、私を批判する人々は、太平洋の義務を果そうとする米国の決意に反対し、極東ではなく、欧州こそが米国本来の利害圏だと主張している。と述べた。

この種の論議は、高度な政策論議の焦点をぼかすだけのことである。歴史上の事実をいえば、アメリカは、太平洋の死活問題を認める前に、すでに太平洋での役割を演じてきた。

アメリカの建国以来、帆船によるシナ貿易や、一世紀以前のペリ提督の日本開港以来、われわれは太平洋における存在を維持、拡大してきた。米国はまた太平洋国家としての義務を怠ったこともない。

真珠湾攻撃で、アメリカは第二次大戦に引きずりこまれたが、その攻撃を受けた理由は、中国および東南アジアを征服するフリー・ハンドを与えなかったからである。歴史の記録に照らして、太平洋におけるアメリカの義務と役割について、ホワイト・ハウスに、新たな天啓があった、ときかされるのは、おかしな話である。

ジョンソン大統領は、かつて太平洋戦争に参加した。今日、彼を批判するものは、欧州にだけ関心を抱く輩だ、とする彼の感情は、ほぼ確実に、戦時中の、ヒットラー第一義「ほぼ確実に、戦時中の、ヒットラー第一義戦略」をめぐる大論争の尾を引いている。

この論争で、チャーチルとルーズベルトは、マッカーサー元帥やキング提督に勝ち、欧州戦線に第一義的順位を与えた。そのため、いわゆる"太平洋第一主義者"の恨みを買った。だが、記録が示すように、チャーチルとルーズベルトは正しかった。

ナチ・ドイツは日本以上に危険な敵だっただけでなく、われわれは、欧州にソ連という恐るべき盟邦をもっていた。ソ連はすでに、ヒットラーと交戦しており、潜在的にも、日本の敵であった。

今日ジョンソンのベトナム戦争を批判するものの多くは、第二次大戦におけるチャーチル＝ルーズベルト戦略の強力な支持者であったので、彼らがアジアを顧みず、欧州にだけしか関心がないというのは、辛情を知らぬナンセンスである。

ジョンソンに対する批判者の主張は、アメリカをアジアの大陸戦争に巻きこむことに対する批判で、大統領が極東における大国としての、アメリカの役割りに関する本来の考え方から離れつつあるという批判である。

彼らの観点では、アジアのかなり大きな地上戦であった朝鮮戦争は、確立したアメリカの原則の放棄を、正当化する前例とはならない。朝鮮戦争はベトナムとは違って、国連によって正当と認められ、欧州とアジアの十七カ国が参加したからである。

にもかかわらず、それは危うく軍事的大敗北になるところだったし、最後には勝利なき、妥協的平和で終った。しかも、それを終結させたのは、アジアの地上戦に反対する米国の伝統で教育され、大統領として、いつも米軍をアジア本土で戦わせることに反対したアイゼンハワー元帥であった。

ジョンソン大統領は、アメリカのこの原則を破ったが、それは、彼の見るところでは、太平洋の大国としてのアメリカの義務を果すためなのである。一年八カ月前、ジョンソンは、まだ"アメリカの若者"を、"アジアの若者"との戦いに派遣しないといっていた。アメリアをアジアの地上戦に巻きこませた戦略上の誤りを重ねて、大統領はアジアにおける和平達成の方式が、ヒットラーが平和を見出した当時の、欧州と同じだという、政治的誤りを強みあげた。

だが、この二つは同じではない。

一九三九年、欧州問題は、ナチスが、欧州大陸の古い既成国家を征服しようとしたことから提起された。

今日のアジア問題を提起しているのは、地

文藝春秋の本

ビジネス"革新"時代の必読書
「文春ビジネス」第2弾！
Bunshun Business

文春ビジネス
会社で教えないこと 脇田保 360円
会社には上司から教わったものだけでは理解できない思考、行動の法則がある。異動、転職、合併ショックなどを分析、生きがいある生活を追求！

文春ビジネス
三菱対住友 亀岡大郎 340円
敗戦により解体された財閥は、いまや銀行を頂点とする新しい形の企業集団となって、強力な姿を現わした。三菱、住友に焦点をあてた激戦の実態

文春ビジネス
人を動かすスピーチ 扇谷正造 380円
話のタネが生きている。扇谷君はこれからしゃべることが無くなるんじゃないかと心配だ。吉川英治人生語録」はさすがに面白い（大宅壮一氏評）

文春ビジネス
幹部へのパスポート 鈴木博 360円
ドラッカーやマグレガーの理論を日本的風土に生かした新出世術

文春ビジネス
プロサラリーマンの健康設計 田多井吉之介 360円
"もとでは何といっても"からだ。すぐ役に立つ健康法

文藝春秋の本

史説 山下奉文 児島襄
"マレーの虎"と勇名を馳せた山下奉文を新資料のもとに捉えなおし、その一身に二・二六事件から敗戦までの帝国陸軍の命運を象徴させた力作！ 480円

蝶の戦記 池波正太郎 480円
上杉謙信に味方して川中島の決戦に活躍する美貌の女忍者を描く傑作長篇

槍ヶ岳開山 新田次郎 480円
百四十年前、人跡未踏の三千メートル峰・槍ヶ岳に登頂した播隆を描く！

志賀直哉私論 安岡章太郎 1000円
巨匠の生い立ちと作品を通して私小説・肉親の問題を考察する本格評論

歩兵第二連隊長時代の山下奉文（昭和六年）

球上の低開発、後進国家を席捲しつつある戦闘的な共産主義革命である。今日のアジアにおけるアメリカの問題と、当時の欧州におけるアメリカの問題との間に、なんらかの類似点がありとすれば、それは、われわれが、ヒットラーの場合のように、侵略の事例に直面しているということではなく、東南アジアと中国が、今日、一九一七年以降のソ連のように、一種の革命の陣痛期にあるということである。

西欧での共産主義革命の脅威は、東欧で地上戦を戦うことなく処理された。

太平洋における、高度な政策の、真剣な討議は大いに必要である。だが、もし大統領が今後も自分を批判するものは、〝アジアの平和への脅威を無視している〟として、問題をぼやかしつづけようとするならば、そうした討論は行われずじまいになるだろう。もし彼が、そんな水準にまで、論議を低下させるなら、真剣な討議は行われまい」

太平洋国家論をめぐるジョンソン・フルブライト・リップマンの論争が、いずれに正当性をより多く与えるかは別として、ニクソン大統領が、就任して四ヵ月後に、ベトナム戦争を停止さす気になった事実を否定するものはない。

歴史の記録は、アメリカの敗北をマークした。問もなく、アメリカ軍の撤兵が開始されベトナム民族自決の基本線を辿って戦争は終結するだろう。

ではなぜ、タカ派であったニクソンが、戦争終結を決意したか。

ドル防衛や黒人問題など、国内に処理すべき難題を山積しているためでもあるが、それより、もっと重大なことは、ベトナム戦争を停止させようとするアメリカ世論の重圧であった。

アメリカ世論の重圧は、反戦論者のマッカシーを担いだ多数の反戦学生のノロシで端を発したが、反戦学生たちは、原則として民主義のルールに従い、大勢として、一九六八年の大統領選挙に挑戦する戦略をとった。

ロバート・ケネディが狙撃され、暗殺されさえしなければ、彼はおそらく、ニクソンに代って、大統領に当選したであろうし、もしそうなら、ロバート・ケネディは、もっと早く、この戦争を終結しようとしたに違いあるまい。

リップマンの指摘した太平洋国家論への批判は、必ずしも全てのアメリカ人良識を満足させないにしても、多数の良識に対する強い説得力をもっていたと思う。少くとも、当時、なかったとしても、現在はあるはずである。

アメリカの新思潮

ニクソン大統領の戦争を終結させようとする良心的な大決断を考える思潮のバック・ボーンの中にも、大なり小なり、これに近い考え方は生きているはずである。

アジアの地上戦争に巻きこまれるな。過度の国家義務を背負いこむな。アメリカの若者をアジアの若者と殺し合わすな、とする思潮が、もしアメリカの伝統でなかったとしても、ベトナム戦争は、ほぼ同質の教訓を、新たにアメリカ人に教えこんだはずである。

ジュネーブ協定成立から十五年の歴史が経過した。そして、アメリカがアジアの地上戦争から敗退してゆくのである。

もし、ニクソン大統領が、ベトナム戦後の新たなアジア戦略を組上げ、その構想を防波堤として、ベトナムからの撤退を開始しようとするとき〝アジアの若者に〝アジアの若者〟を対決させるべきだとする新思潮が生れていても、決して不思議ではないはずではないか。

ここに、六〇年安保と違った七〇年安保の深刻さがある。

しかも、ニクソンは、大統領就任前のいくつかの演説集の中で、アジアの防衛へのアメリカの貢献を、空、海軍に依存すべきであって、米軍が陸上戦の負担を軽減すべきであることを指摘していた。

日米安保は、もはや明白に方向づけられたといってよいはずである。

佐藤首相は、アメリカ思潮の変遷をめぐる日米安保の傾向的変化に目を掩い、祖国防衛の第一義的責任を強調するあまり、安保体制の中の、太平洋の責任を日本が一部肩替りすることと大きな危険性を見逃しているようである。見逃していない、とすれば、日本の大国意識にかられるあまり、フルブライトがいみじくも指摘したような、日本がアジアの警察国家となり、仕送り人（パトロン）となって戦前の世界に返り咲く夢をみているのではあるまいか。

七〇年安保の危険性は、日米相互の双務運帯にあるのではない。日本を防衛してくれるアメリカの国土が、侵略されたとき、日本がアメリカの防衛を支援するのは、相互防衛条約の原則であり、双務運帯国家の責任であり債務でもある。

しかし、アメリカには、そのような危険はない。あるのは、いまや、日本の裏庭の朝鮮半島なのである。

米韓相互防衛条約が存在する。朝鮮戦争以来の歴史的必然の所産である。

日米安保条約が存在する。サンフランシスコ講和条約以来の歴史的必然の所産といえるだろう。

しかし、いま、日韓防衛条約はない。にもかかわらず、府中の航空自衛隊総司令は、朝鮮におけるEC121撃墜事件で、準戦スクランブルを全自衛隊隊員に発令しているのだ。

三段論法の飛躍であり、三角関係が矛盾した飛躍をなしつつあるのだ。

もう一つ、多くの日本人が見落している点があるはずではないか？それは、日本に対する北朝鮮ないしは、中国の直接脅威と、韓国に対する直接脅威の関係が、日韓両国が、別個にアメリカと相互防衛条約を結んでいるという理由で、劃一化されようとしていることである。

ビタミン剤ではない

アメリカは、自由世界の指導国家として、アジアにおいて、韓国を共産主義侵略から守りぬくことを繰返してコミット（義務づけ）してきた。その義務意識は、果して永遠なるものとして原型のまま持続されうるかどうかに、大きな問題を生じているのだ。

それが、リップマンが指摘する批判的思潮であり、時にベトナム戦争の教訓は、アメリカ人に、生命を犠牲にしても、アジアの同盟国を守りぬく義務意識を、少くとも多少は軽減させ、

「隣国の友邦、日本が拱手傍観しているのに、なぜアメリカだけが戦うのか」という重大な懐疑を発生させたといえるだろう。

ここ一年、タカ派、ハト派を問わず、アメリカは日本に大きく期待をもちはじめたが、朝鮮防衛の危険度は、アメリカ本国と日本の場合、それが全く深度を異にするものであることを、彼らは忘れている。

アメリカが朝鮮で戦う場合、犠牲は戦場に派遣された将兵に限られるが、戦場と至近距離にある日本は、国土もろとも、戦火を浴びる危険を内蔵している。

日本が韓国との間に、軍事的双務運帯を拒否するのは、むつかしい戦争理論を抜きにしても、国民が、戦火の直接被害の恐怖を熟知しているからであろう。

ベトナム戦争が終結に近づいた途端、突然戦火が朝鮮に移動しはじめたとき、多くの日本人は、いまさらながら、肌に伝わる恐怖感におののいた。

そして、改めて安保を見返す気になったものが少くなかったが、なお多くの施政者と国民が、安保条約が、自衛隊という軍隊に、発砲させる条約であることを忘れているようである。条約は、ビタミン剤ではない。

緊急に際し速効性をもつ劇薬なのである。

（イラスト＝安岡明夫）

酔うか。酔わないか。

サッポロ〈ライト〉注目の新発売。
議論に終止符が打たれます。

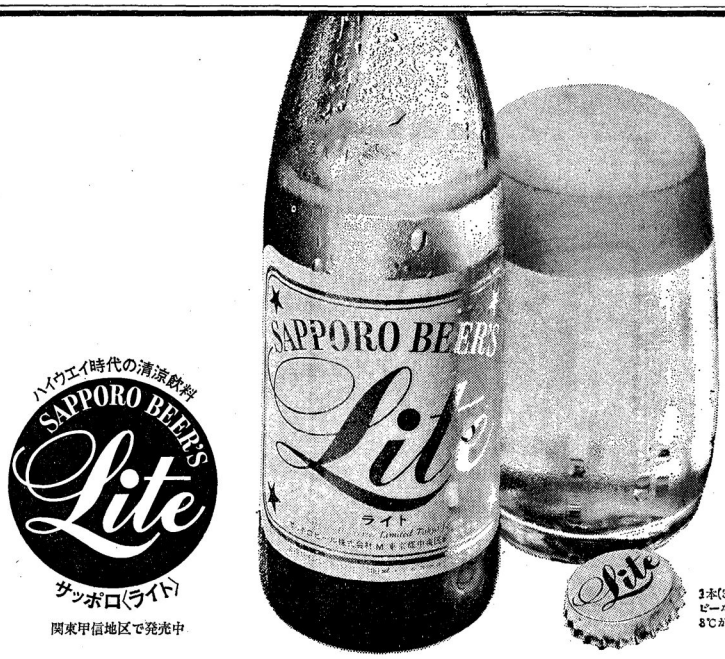
酔うか。酔わないか。あれはビールではないか。いや、清涼飲料と云う話だ――発売前から超大型の話題を呼んだサッポロ〈ライト〉。そのすべてが今日わかります。本日、注目の新発売。

〈ライト〉は、どんな飲みものでしょうか。

サッポロ〈ライト〉はビールと同じ原料
同じ醸造方法でつくられます。
しかし、アルコール分は1%未満（普通ビールの⅓）に押さえてあります。
サッポロが〈ライト〉のためにとくに育てた酵母〈S1〉の成果です。〈S1〉は低アルコールに発酵を制御しながら絶妙なうまさを生む、まさに画期的な酵母なのです。そして大きな期待を寄せられている〈ライト〉の味。これはちょっと言葉では表現できません。ただクールライトなうまさとだけ申し上げておきましょう。あなたの味覚で、ノドで、確かめてください。

〈ライト〉は昼を新しくする。

いよいよ、ハイウエイ時代の幕が上がりました。行動する若者のための新しい清涼飲料が今ほど望まれる時はありません。〈ライト〉は甘みを拒否する人の真昼の清涼飲料。ビジネスマンが勤務時間中に堂々と飲めます。今日から、昼が新しくなりました。



関東甲信地区で発売中

1本（300ml）＝60円
ビール同様、よく冷やしてお飲みください。
8℃が適温です。

Confidential

サイン・ポール　安岡明夫

ミサイルに弱く修理体制不備
遠い24時間稼動のバッチ

航空自衛隊の自慢する「バッチ・システム」（自動防空警戒網）が稼動してから二月たった。わが国の防空警戒網は、「二百五十機近くの飛行機を同時に追尾できる」という。しかし、この二月間、二百五十機近くの飛行機が飛んだ日は、わずか二日だけだった。これは、わが国の防空警戒体制が、「手の届かない」ほど、ずいぶんと遠くなったことを意味する。

「バッチ」システムは、ソ連の「ターン・キー」システムを使ったものだ。ターン・キーとは、ソ連の技術者が、ボタンを押すだけで、すぐ使えるようにしてあるシステムのことだ。ソ連は、ターン・キーシステムを、ポーランドなどに売っている。ポーランドは、ソ連のターン・キーシステムを使って、ソ連の技術者の指導のもとに、ポーランドの防空警戒網を作っている。

ソ連のターン・キーシステムは、ソ連の技術者が、ボタンを押すだけで、すぐ使えるようにしてあるシステムだから、ポーランドの技術者は、ソ連のシステムを使うだけで、ポーランドの防空警戒網を作ることができる。

ポーランドの防空警戒網は

今週の世界

アメリカ

中南米の"ロッキー・ウェイ"
前途は多難の"低姿勢"

「ロッキー・ウェイ」――ところどころの過ぎ読まれる中南米の旅を終えて、ロック・フェラー・ニューヨーク州知事は「日本アメリカに帰った。知事は、ニクソン米大統領の特使として対ラテン諸国三十三カ国を回巡わりで歩き、ボリビアを皮切りに、ブラジル、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、ガイアナ、トリニダード・トバゴ、ベネズエラ、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ペルー、エクアドル、コロンビア、ベネズエラ

大型輸送機盗んだアメリカ兵

4億5千万円の盗難品C—130

国際事件簿

息せきって空港へ

ボール・メイヤーは、あれほど待っても来ない友を悪くベチランで、やっぱりだった。メイヤーは思ってもいなかったことだが、この一百万ドルの盗難品は、ベトナム戦争の中で、ベトナム人の手に渡ることもなく、ベトナムにもいなかったことがある。二月末のことである。ベトナムの南部国境に近いメイヤーがなんとかしようとしたが、ベトナムの国境は二百万の難民がひしめき合っていた。メイヤーは、ベトナムの国境を越えてカンボジアへ逃げ